

小学校教科「外国語（英語）」のシラバス構成について —教員養成コア・カリキュラム（試案）の検討に基づく提案—

竹腰 佳誉子, 内藤 亮一, 荻原 洋

On the Syllabus Construction of the GAIKOKUGO (English) in the Japanese Elementary School: A Discussion and Proposal on the Tentative Plan for the Core-Curriculum of Teacher Training Course

TAKEGOSHI Kayoko, NAITO Ryoichi, OGIHARA Hiroshi

E-mail: kayoko@edu.u-toyama.ac.jp

E-mail: naitoh@edu.u-toyama.ac.jp

E-mail: ogihara@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：小学校英語，シラバス，コア・カリキュラムのシラバス，英語の音声と文法，マザーグースと児童文学，異文化理解・コミュニケーション

keywords：English education in the Japanese elementary school, a syllabus for the core-curriculum, English sounds and grammar, Mother Goose and children literature, intercultural understanding and communication

はじめに

小学校英語の教科化については、平成30年度から先行実施（移行期間）、平成32年度から全面实施ということが決まっており、それに伴い、小学校から高校までの英語教育に体系性を持たせるためのカリキュラム作りが行われつつある。従来、小学校で英語が扱われる場合は「外国語活動」の一環としてであり、中学校英語も「ゼロからのスタート」であったため、小学校英語と中学校英語は「連携」こそ奨励されたものの、「接続」を担保したものではなかった。

そこで、その接続を担保するために、文部科学省では「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」（平成27年度新規事業）を立ち上げ、「小学校教員養成コア・カリキュラム（試案）」および「中・高等学校教員養成コア・カリキュラム（試案）」を示すに至っている。

コア・カリキュラムは、大きく分けて「全体目標」「教職に関する科目（教科の指導法）」「教科に関する科目」から成っているが、本小論では、以下の2点について検討する。

- 1) 小学校コア・カリキュラムと中・高等学校コア・カリキュラム（ともに試案）に見られる体系的確保の視点
- 2) 「教科に関する科目」（小学校コア・カリキュラム）のシラバス構成に対する考え方

小学校の「教職に関する科目」については、本小論の著者の専門領域外であるため、コア・カリキュラム全体に関して小中高の比較を行う場合を除き、ここでは扱わない。

1. 小学校コア・カリキュラムと中・高等学校コア・カリキュラム（ともに試案）から読み取れる体系的確保の視点

以下、コア・カリキュラムの大きな3つの柱である「全体目標」「教職に関する科目（教科の指導法）」「教科に関する科目」のそれぞれにつき、体系的確保の視点からその内容を検討してみたい。

1.1. 全体目標

全体目標のうち、教員の指導力に関しては、小学校コア・カリキュラム（以下、小学校CC）では

「授業設計と指導技術の基本」「英語の授業ができる英語力・指導力」といった一般的な表現に止まっている一方で、中・高等学校コア・カリキュラム（以下、中高 CC）では「4 技能にわたる総合的なコミュニケーション能力を育成するための指導・評価の基礎」「英語で授業ができる」「CEFR B2 レベルの英語力」など、かなり具体的な指導力の目安が示されている。

また、児童生徒が身に付ける資質・能力に関しては、小学校 CC で「楽しさ」「慣れ親しみ」「気づき」「音声」といった表現が目立つ一方で、中高 CC では技能毎の能力の獲得が意識されている。思考力・判断力・表現力等に関しては、小学校 CC では「自分の」「身の回りの」、中高 CC では「情報や考え」「的確に」「適切に」「発信」といった表現を用いて、コミュニケーション能力のステップアップを意図している。

最後に、学びに向かう力・人間性等に関しては、小学校 CC では「楽しさ」から「大切さ」「相手意識」へと向かわせ、中高 CC ではその意識が「他者の尊重」「相手への配慮」などに結実していくことが期待されている。

1.2. 教職に関する科目（教科の指導法）

教職に関する科目（教科の指導法）については、小学校 CC では 2 単位以上、中高 CC では 8 単位以上となっており時数的にはかなりの差が見られるが、盛り込まれる要素はほぼ同じであり、小学校 CC の本科目をどのように組み立てるかが課題となるであろう。

小学校 CC に盛り込まれることになるであろう内容で特に注意すべきことは次の 5 点である。（これ以外にも多くの要素が盛り込まれているが、取り立ててコメントする必要のないもの、あるいは教科に関する科目のところでも扱うものについては、ここでは触れないことにする。）

- 小中高連携
- 多様な学校・児童のニーズへの対応
- 子どもの第二言語習得への理解
- 英語による児童とのやりとり
- CAN-DO リストの活用（到達目標及び評価）

「小中高連携」は小学校 CC でも中高 CC でも当

然触れられているが、小学校 CC での本科目は僅か「2 単位以上」である。小学校英語が中学校英語の基礎となる以上、小学校の教師は中学校英語の中身のある程度は知っていなければならない。少なくとも当該校区にある中学校が使用している英語教科書 3 学年分で扱われている言語素材や指導法については学んでおくべきであるが、2 単位の中でそれに必要な時数を確保することは到底できないので、何をもって小学校 CC で小中高連携に関する学びを担保するのは簡単な問題ではない。

「多様な学校・児童のニーズへの対応」は中高 CC には言及がないものであり、5 年生から英語が教科として始まる前にそれぞれの学校が独自で英語教育に取り組んだ場合などの対応を念頭に置いたものと思われる。

「子どもの第二言語習得への理解」に関しては、中高 CC にも専門知識としての「第二言語習得論」が盛り込まれているが、小学校 CC では「言語使用を通して」「類推から」「音声に対する敏感さ」などの表現が用いられており、小学校での英語学習が母語や（外国語でない）第二言語の習得に近い条件の下で行われるはずだという（やや独善的な）期待感が込められている。

「英語による児童とのやりとり」は指導技術として触れられている。特に「英語での語りかけ方」は良質なインプットを保証する重要な要素である。一般に小学校教師の方が中高の教師に比べ児童・生徒への語りかけは得意であるが、英語の音声の基本を伴った語りかけとなると十分な知識と訓練が必要であり、限られた時数を考えると、どこまで扱えるかは難しい問題である。

「CAN-DO リストの活用（到達目標及び評価）」は、中高でも積極的に取り入れようとする動きがあるが、中高 CC（試案）には登場していない。小学校 CC だけに盛り込んだのは、先に触れた「言語使用を通して」外国語を学ぶということを担保する仕組みという意味があるのだろう。

1.3. 教科に関する科目

教科に関する科目は、小学校 CC で 2 単位以上、中高 CC では 20 単位以上と、教職に関する科目以上に開きがある。それにも関わらず要素的にはほとんど同じものが列挙されているため、ここでもまた小学校 CC での本科目の組み立て方が大きな課題であ

る。両者の相違を簡単に示すと次のようになる。

まず、ほぼ同じ扱いとなっているのが「技能統合型の英語コミュニケーション」であり、これまで「聞く・話す」が中心だった小学校英語においても「読む・書く」が求められている。ただし、どの程度の「読む・書く」が求められるかは、他の要素との関係を見なくてはいけない。例えば、小学校 CC では「発音と綴りの関係」が独立した要素として列挙されており、「読む・書く」もこの段階を強く意識したものとなるだろう。

英語コミュニケーション以外の要素は、小学校 CC が「英語運用に必要な基本的な知識等」という 1 つの括りなのに対し、中高 CC では「英語学」と「異文化理解・文学」の 2 つの大きな括りに分けられている。ただし、小学校 CC の 1 つの括りの中身は中高 CC の 2 つの括りの中身を足したものとほぼ同じであり、小学校 CC では個々の知識が統合的に扱われることが求められていると言えよう。また、小学校 CC の方では、いくつかの要素に「基本的な」という修飾が付けられていたり、そのような表現が付いていなくても、具体的な内容を示すことでより基本的なことがらを扱うよう求められているものがある。

例えば、中高 CC の「英語の音声の仕組み」「英語教育に関わる英文法」「第二言語習得論（教職に関する科目の中の専門知識）」は、小学校 CC では「英語の基本的な音声の仕組み」「音声・語彙・文法の基本的な知識」「第二言語習得論の基礎」（下線は筆者）となっている。また、中高 CC の「英語で書かれた文学」「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化」は小学校 CC ではそれぞれ「マザーグース・絵本・児童文学」「様々な国・地域の生活・習慣」である。

なお、中高 CC の「英語学」の中に「英語の歴史の変遷、国際共通語としての英語」が入っているが、英語が世界的に用いられるようになるにつれ、英語の姿かたちも大きく変容しつつあり、基本的な発音や文法として何を想定するかを考える際、英米の英語を基にするか国際共通語としての英語を基にするかによって、基本的な要素の選択に影響が出ると思われる。

2. 「教科に関する科目」（小学校コア・カリキュラム）のシラバス構成に対する考え方

ここでは、小学校の「教科に関する科目」の内容と扱い方について検討し、シラバス構成の一例を提案する。その際、「2 単位程度以上」という案が出ていることを考慮し、「2 単位の授業時間（1 コマ 90 分×15 回）に収まるもの」ということで、以下のような領域構成及び時間配当で考えたい。

<授業実践に必要な英語力等>（3 コマ）：聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、技能統合型の活動

<英語運用に必要な基本的な知識等>（12 コマ）

- a. 言語学および第二言語習得論に関する領域（4 コマ）：英語の基本的な音声の仕組み、音声・語彙・文法の基本的な知識、発音と綴りの関係、第二言語習得理論の基礎
- b. 文学および文化に関する領域（4 コマ）：マザーグース・絵本・児童文学、様々な国・地域の生活・習慣
- c. 異文化理解および交流に関する領域（4 コマ）：異文化交流、様々な国・地域の生活・習慣

この領域構成及び時間配当の方針に基づいて、15 回の授業計画を次のように提案する。

- ① 音声による授業実践「聞くこと・話すこと」
- ② 文字による授業実践「読むこと・書くこと」
- ③ 技能統合型の活動
- ④ 第二言語習得論と言語学
- ⑤ 英語の音声の仕組み
- ⑥ 英語の音声と綴りの問題およびフォニックス指導
- ⑦ 英語の文法および構文法
- ⑧ マザーグース
- ⑨ 英米の絵本
- ⑩ 英米の児童文学
- ⑪ 英米の文学と生活
- ⑫ 文化と多様性
- ⑬ 異文化交流と言語コミュニケーション
- ⑭ 異文化交流と非言語コミュニケーション
- ⑮ 異文化理解とステレオタイプ

以下、<授業実践に必要な英語力等>（①～③）、<基本知識 a：言語学および第二言語習得論に関する領域>（④～⑦）、<基本知識 b：文学および文

化に関する領域> (⑧~⑪), <基本知識c:異文化理解および交流に関する領域> (⑫~⑮)の順に, シラバス構成の考え方等を述べていく。(なお, 内容が多岐に渡るため領域毎に参考文献を示す。)

2.1. 授業実践に必要な英語力等 (①~③)

既に触れたように, 小学校 CCでも中高 CCでも技能統合型の活動を行えるような英語力・指導力が求められている。しかし, その活動の中身(目標)には違いが見られ, 中高 CCでは「話すこと」に「発表・やりとり」が括弧書きで付け加えられているのに対し(「話すこと(発表・やりとり)」), 小学校 CCにはそのような記述はないものの, 「教職に関する科目」の指導技術に関する記述の中には「児童の発話の引き出し方・児童とのやりとりの進め方」という項目がある。つまり, 中高 CCで目指しているのは4技能を統合した生徒間での自主的な意見・情報のやりとりであり, 小学校 CCが目指しているのは一義的には(教師が中心的役割を果たす)児童と教師の間のやりとりであると言える。

教師と児童のやりとりが主となる場合, 教師の発する(表示する)英語は児童にとって最も重要なインプットになる。そこで, この領域の3回の授業を「聞くこと(児童にとっては話しことばのインプット)・話すこと」と「読むこと(児童にとっては書きことばのインプット)・書くこと」の2回と, それらの技能を統合した学習活動における留意点等で構成することが望ましいと考える。

「聞くこと・話すこと」で留意すべきことの1つは, 小学校の高学年では英語をただ聞かせていても学習効果が上がるとは言えないという点である。実際, 第二言語習得環境(英語使用国への移住など)においてさえ, 7歳を過ぎるあたりから母語話者並のリスニング能力の獲得は困難になるという調査・実験もある(白畑, 2004)。そこで「聞くこと」を効果的に指導するために日本人教師による工夫されたインプット(enhanced input)が重要となる。例えば, 日本語にはあまり聞かれない強い摩擦を伴う音などは, 教師が意識的に摩擦を強くして発音すると, 児童も音の特徴に気づきやすくなる。また新たに学んだことは自分でもやってみたいのが学習者の心理であり, 誇張された摩擦音を誇張された発音で真似させてみるというようなことが, 「話すこと」のスタートとして, また日本人が英語の(英語らし

い)発音を習得するための基盤づくりとして, 良い授業実践となる。

また, できるだけ自然な英語を聞かせるためには, 日本の教室で良く耳にする「単語と単語の間にポーズを入れ, 理解しやすくした発音」は避けるべきである。そのためにも単語の境目は本来イントネーションの変化で示すということを教師は知るべきであり, 誇張された音を真似することで英語音を習得していくのと同じように, 児童もイントネーションのある英語を発する癖を早い段階から身につけていくことが望ましい。

なお, ことばの習得には沈黙期(silent period)があり, 学習は行われているが成果が表に現れない時期があるということを知ることが大切である。「聞くこと」と「話すこと」の間に十分なタイムラグを許容するような指導が望まれる。

そこでこの授業では, 音声インプットの重要性, 音声インプットの工夫, 効果的な語りかけ, 沈黙期への対処などについて講義と実習を行う。

「読むこと・書くこと」については, フォニックス指導を念頭において授業プランを立てることが必要となる。特に初期の読み方指導では, 語頭の子音文字で, 綴りと発音が規則的に対応するものに焦点を当て, 日本語発音にならないように注意しながら十分に時間をかけて練習させるべきである。また書き方の指導では, そのように読む練習をした文字を正しく発音しながら書くことによって, 読み方の学習を補強することを中心とすべきである。従って, 単語カードなどを使う場合でも, 当該文字を強調するなどの工夫が効果的である。文を読み, 文を書くということは, 小学校段階の読み書きの目標としては性急に過ぎ, その後の英語学習を支える基盤の形成がおろそかになる危険性が高い。

そこでこの授業では, フォニックス指導の導入も兼ね, 文字の提示の仕方, 文字と音声の結びつきを確かにする指導法, 文字の書き方指導における留意点などについて講義と実習を行う。

「技能統合型の活動」については, 教師と児童の間のやりとりが主となるため, 教師の語りかけを中心に4技能の活用場面を作ることになる。例えば, 教師が物語を, 工夫された発音で, さらに単語が書かれた絵などを時々示しながら語り聞かせ, 児童はその内容について口頭であるいは文字を書いて反応するといった活動を行えば, 4つの技能の全てを1

つの活動の中で用いることができる。

そこでこの授業では、4技能を統合した学習活動を可能にする語りかけの工夫、技能を統合することによって得られる学習効果などについて、講義と実習を行う。

2.2. 基本知識 a：言語学および第二言語習得論に関する領域（④～⑦）

この領域は、言語学（及び第二言語習得論）、英語の発音、英語の文法の3分野にわたるが、小学校CCで音声と綴りの問題（フォニックス指導含む）が1つの要素として言及されていることを考え、それを含めた4回の授業で構成する。また、これらの要素は相互に関わりあっており、その点にも注意が必要である。

「第二言語習得論と言語学」に関しては、既に述べたように小学校高学年では母語や第二言語環境と同じような自然な言語習得は期待できないので、むしろ母語転移の問題を中心に扱うべきである。正の転移（positive transfer）と負の転移（negative transfer）についての知識は教える側にとって教授方法の選択や授業計画の立案の際に極めて有益である。また、母語転移について理解するためには、言語学の素養も必要であり、第二言語習得論と合わせて扱うことが好ましい。（言語学の素養は、教師にことばの仕組みへの興味を湧き立たせ、教師のことばに対する興味・関心は、児童のことばに対する様々な気づきを促すであろう。）

そこでこの授業では、第二言語習得論の概論を講義し、特に母語転移の問題について詳しく解説する。また対照言語学の手法を用いて実際に日本人の英語に見られる誤りを分析し、転移の影響なのかどうかを判断できる力を身に付ける練習も行う。

「英語の音声の仕組み」に関しては、国際共通語としての英語の使用を前提として、英語の音韻システムの中でも様々な英語のバリエーションに共通する音的特徴について理解を深めることが大切である。中心となるのは子音、子音ブレンド、イントネーション及び発声法などであり、母音、リズム等は特に取り扱わなくても良いであろう。特に学習初期においては、日本語との発声法の違いに気づかせることが重要であり、この時期にそれをしないと今後の英語の発音がなかなか身に付かないことになる。英語を外国語として用いる場合にコミュニケーションが

うまく行かなくなる最大の原因は発音である（Walker. 2010）という調査もあり、小学校教師には発音に常に意識を向けることが求められる。

そこでこの授業では、英語の音声の仕組み全体について簡単に解説し、これからの時代に特に重要となるであろう発音の要素とその指導法について実習を行う。

「英語の音声と綴りの問題およびフォニックス指導」に関しては、英語の場合、音と綴りの対応が非常に不規則的であり、なおかつ基本的な単語においてその傾向が著しいため、学習初期の段階でのフォニックス指導には細心の注意が必要である。フォニックス指導には様々な考え方があがるが、ハイルマン（1981）が言うように「1人で本が読めるようになるための最小限のフォニックスの指導」という考え方を教師が常に持っていることが大切である。例えば松香（2000）では、音と綴りの対応が規則的な順に10級から特1級まで文字の読み方を分けているが、5級の「礼儀正しい母音」ぐらいまでが興味を持って学べる限界であろう。それ以上は英語嫌いを増やすだけである。この見極めの感覚を教師が持つことが大切である。（なお、国際共通語としての英語では、綴り字発音（spelling pronunciation）が自然と増えていくことが予想される。児童が接する英語の種類も多様化するため、教師は綴り字発音に対しても正しく認識しておかなくてはならない。）

そこでこの授業では、フォニックス指導の理念と理論について解説し、実際に教材を作成してみることによって、初期のフォニックス指導における留意点などについて理解を深める。また、英語の国際共通語化に伴う綴り字発音の現状についても触れる。

「英語の文法および構文法」については、第二言語習得論の知見である「自然な習得順序」や「教授可能性仮説」などを踏まえ、「大人の目からみた‘基本的’文法事項」などに惑わされず、発達段階に応じた、インテイクに繋がる工夫されたインプットを十分に与える教え方等を知る必要がある。また、国際共通語としての英語を意識した「小学校段階で押さえておきたい文法・構文法」を考えるべきである。例えば、細かな語尾変化（三単現のsなど）はこの段階では意識させる必要はない。児童がsを落としていても、せいぜい肯定的フィードバック（recastなど）を与える程度で止めておくべきであろう（自然な習得順序においても、三単現のsの習得はかな

り後になってからである)。

文法事項の中で、逆に児童に意識させたいのは、語順の重要さや主語の存在である。これらは英語を用いたコミュニケーションでは非常に大きな意味を持ち、さらには社会や他者との関わり合い方にも影響するため、早い段階から意識させることが望ましい。そのためには、文法規則に直接焦点を当てるよりも、自己と他者を常に意識させる言語活動を英語学習と組み合わせる行くことが効果的であろう。(英語の語順を意識せずに英語が使えるようになることが英語力の伸長の基礎となるという研究もあり(太田, 他. 2003), 小学校段階で語順を意識させることは、中高での英語学習に良い影響をもたらす可能性が高い。)

また、初期の英語学習では知っている単語を増やしていくことも目標となるが、「単語の中に文法が組み込まれている」という考え方をすることも、教師には必要である。特に動詞には、その意味に応じて必要となる項(argument)が決まっており、英語の場合はそれらを表現しないことは極力避けられるため、新しい動詞が導入される時は、意味と項の確認をしっかりとしておくことが、文法力の基礎を築くことにも繋がる。例えば、giveには「あげる人」「もらう人」「あげる(もらう)もの」が必要であるが、主語の場合と同様、日本語ではこれらを表現しないことがよくあり、その感覚で英語を使うと不都合が生じやすくなる。小学校段階では文法というものの大げさに考える必要は無いが、児童のその後の英語学習を考えると、文法に対する正しい理解と高い意識が、教える側には求められる。

そこでこの授業では、初期の英語学習において押さえておきたい文法事項・構文法について、第二言語習得論や対照言語学の知見に基づいて講義する。また、語彙習得に関する研究を紹介しながら、小学校段階での効果的な語彙指導について解説と実習を行う。

ハイルマン, A. W. (松香洋子監訳) 1981. フォニックス指導の実際. 玉川大学出版部. (原著 Heilman, A. W. Phonics in Proper Perspective. 1976. Bell & Howell.)

松香洋子. 2000. アメリカの子供が「英語を覚える」101の法則. 講談社+α文庫.

太田 洋, 他. 2003. 英語力はどのように伸びてゆく

か. 大修館書店.

白畑知彦(編著). 2004. 英語習得の「常識」「非常識」. 大修館書店.

白井恭弘. 2008. 外国語学習の科学. 岩波新書.

Walker, Robin. 2010. Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca. Oxford Univ. Press.

2.3. 基本知識 b: 文学および文化に関する領域 (⑧~⑪)

この領域は、ことば、文学および文化に関わるものである。文科省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」(以下「事業」)で示された小学校 CC と中高 CC は、中教審にもとづいた「外国語教育で身に付けるべき資質・能力」として語学力一般とともに「学びに向かう力、人間性等」を挙げている。具体的には、相手・他者を尊重しながら外国語でコミュニケーションをとる態度と「言語や文化に対する関心」である。

「事業」の参考資料には、平成26年度の有識者会議で、科目としての英米文学を「文学作品を読むことにより、文章表現などの英語力の向上に加え、英語圏の歴史、社会、文化についても学ぶことなどを目的とした科目」と位置付けていることが付してある。このことから、英米文学は小学校 CC で目標とする、英語力の向上と文化への関心を高めるための有効な手段と言えよう。

もちろん小学校と中・高等学校では、文学に関して児童・生徒に求められるものは異なってくる。小学校 CC では「マザーグース」は、実践を通して英語力を身につけるための手段であることに焦点がある。それに対し、中高 CC では科目「英語で書かれた文学」について、「言語を学ぶ際に、当該言語で書かれた文学について理解することは重要であり、中・高等学校の英語担当教員には、英語で書かれた文学についての基礎的な理解が求められる」とある。ただし、小学校 CC においても、コア・カリキュラムの科目の他に、大学で扱うことが望ましい項目として「英語で書かれた児童文学の歴史」が挙げられているように、小学校教員にも文学そのものに対する基礎的理解が重要であるのはいうまでもない。したがって中学校の英語教育との円滑な接続を担保するために、本シラバスにおいては中学校で扱うレベルの「英語で書かれた文学」に関する知識なども含

めている。

次に他領域との関係・連携について述べると、言語学とくに音韻論との関係については、言語学の領域で学んだことをマザーグースや絵本を読むことで定着させるという関係にある。小学校 CCにおいても「マザーグースやナーサリータイムは音韻認識やプロソディーの獲得に有効であるといった意見も聞かれた」とあり、科目の具体的指導として「英語らしいリズムを意識したマザーグース等を朗読したり、聞き手が子どもであることを意識しながら絵本の物語を語り聞かせたり、英語で書かれた児童文学の音読や黙読を行う」とある。また英語で書かれた文学の意味やニュアンスを深く理解するうえでは、文法などの言語学の知識が重要であり、逆に文学作品を読むことを通して、言語学で得た知識の理解を深めることにもなる。

異文化理解については、外国文学を通して外国の文化を学ぶことが、異文化理解につながるものであることはいうまでもない。小学校 CCにおいても、「相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」すなわち異文化理解の土台と、「言語や文化に対する関心」すなわち文学を読むことで涵養されるものが、「学びに向かう力、人間性等」としてまとめてあり、異文化理解と文学は密接な関係にある。

文科省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（以下「審議」）でも、小中高一貫して「言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成していくことが求められる」とある。ここからも言語・文化の理解が異文化理解・異文化交流につながると考えていることが読み取れる。また文学作品には往々にしてうまくいかない様々な他者とのコミュニケーションが描かれており、外国文学を読むことは、コミュニケーションの難しさを体験することでもあり、他者への尊重の態度を涵養するものである。

国語教育との関連では、「Hi, Friends! 2」の Lesson7 に「世界の童話、日本の童話」があるように、国語で用いられる日本の物語などとの比較によって世界の多様性を理解させるようになっている。小学校の教員であれば日本の童話に関して知識はあるだろうが、世界の童話などについてもある程度の

知識が要求されることになろう。

以上を踏まえ、この領域を「マザーグース」「英米の絵本」「英米の児童文学」「英米の文学と生活」の4回の授業で構成する。

「マザーグース」をはじめとする英米の童謡は小学生に英語の音韻認識や韻律を定着させ、かつ英語圏の文化を知るための格好な教材である。

この授業では、そのなかでも最も有名なマザーグースを例として取り上げて、概説と代表的な作品の読解を行い、マザーグースを教材として使えるための知識を習得し、また朗唱の実践ができるようになることを目的とする。とくに英語の音を楽しむために、作品の韻律や音遊びの側面を分析したうえで、実際に朗唱を実践してもらおう。余裕があれば、英語の韻律を使って自作の1～2行ほどの短い詩を作ってもらおう。

それとともに、マザーグースの成り立ちや隠れたテーマやジャンルなど、英米の文学・文化を理解する教材として利用できるよう解説する。また、谷川俊太郎などの日本語訳と比較して、日本語と英語の違いを教える教材としての可能性を探る。

「英米の絵本」は、童謡と並んで、子どもが楽しんで英語を習うことのできる教材である。すでに小学校中学年でも絵本の教材は活用されており、デジタル絵本の活用も見込まれているなか、絵本についての基礎知識は必須のものである。文科省のホームページにも小学校教員向けに、小学校中学年を対象とした外国語活動における絵本の活用の仕方が掲載されており、読み聞かせの指導上の注意点なども説明してある。

この授業では、さらに英米の絵本についての理解を深めてもらうことを目的として、英米の絵本の歴史を概説し、代表的な作品からの抜粋を精読する。その際に、マザーグースの時と同様に英語のリズムや言葉遊びなどの側面に焦点を当てる。また小学校でアルファベットや読む・書くことが取り入れられることを踏まえ、アルファベットを教えるのに適した絵本なども紹介し、読み聞かせの実践を行う。

また、子どもとのインタラクティブな授業を想定して、作品に関するディスカッションを行い、作品によっては様々な解釈ができることを会得する。

「英米の児童文学」は、小学校で実際の教材として用いることができるものはかなり限られてくるだろう。しかしながら、『ハリー・ポッター』シリー

ズをはじめ、多くの作品が児童に馴染みのあるものであり、かつ人気のあるものである。抜粋であれば授業で用いることも不可能ではない。

そこでこの授業では、児童文学を授業の教材として使うための基礎として、英米の児童文学の歴史と代表的な作品の概説および抜粋の精読を行う。抜粋の精読は小学校教員に求められる英語力向上にも資することを目的としている。

また、児童文学の既存の物語をもとにオリジナルの英語劇を作ること、作品を楽しみながら英語の力をつけることができる。すでに「Hi, Friends! 2を活用した年間指導計画例」にも、「オリジナルの物語を作って演じよう」というActivityがあるが、これは英語コミュニケーションの実践としても有効である。この授業でも英語劇の実作を少しだけ試みる。『ピーター・パン』や『夏の夜の夢』などは子どもにも楽しめる題材である。『ゴドーを待ちながら』はうまく指導すれば、子どもの想像力をかきたてる芝居である。平田オリザの『演劇入門』（講談社現代新書）などは誰にでもできる演劇の作り方のよい参考になる。

「英米の文学と生活」は、英米の文学に英米の文化・生活が表現されていることを、実際の作品を読んで体得する。また小学校の英語教育においても、十分な英語力が求められており、文学作品を通して総合的な英語表現力を向上させることをねらいとする。

この授業では、これらの目的を達成するため、英米の文化や生活が描写されている文学を精読して、テーマについてディスカッションを行う。とくに子どもが主人公として登場する作品や、人間関係に問題があり、相手を尊重する態度を育てるのに資するような作品を読むこととする。

東京学芸大学. 文部科学省委託事業, 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業. 平成27年度報告書 平成28年3月31日.

文部科学省・教育課程部会. 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告) 平成28年8月26日.

文部科学省. 英語教育の在り方に関する有識者会議. 参考資料・英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業. 平成27年度報告書.

文部科学省. 中学年を対象とした絵本活用に関する

基本的な考え方.

文部科学省. “Hi, friends!” 関連資料.

2.4. 基本知識c：異文化理解および交流に関する領域(⑫～⑮)

次に異文化理解および交流に関する領域である「異文化交流」, 「様々な国・地域の生活・習慣」を扱うシラバスの内容について述べていく。文部科学省は「今後の英語教育の改善・充実方法について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」を発表し、そのなかで学校間の接続(小・中連携, 中・高連携)の不十分さを指摘するとともに、小・中・高等学校を通じた英語教育の充実, 強化を進めていくことを提案している。このような英語教育改革の背景にあるのは、グローバル化が進展していく中での英語力の重要性であり、異文化理解や異文化コミュニケーションの重要性である。「社会のグローバル化の進展への対応は、英語さえ習得すればよいというものではない。日本人としての歴史・文化等の教養とともに、思考力・判断力・表現力等を備えることにより、自ら情報や考えなどを発信し、相手とのコミュニケーションができなければならない」(文部科学省. 2014) のである。

上記の我が国の英語教育改革の方針を踏まえると、英語教育強化のためには、小・中・高等学校を通じた学習到達目標を設定し、一貫した異文化理解、異文化コミュニケーション能力の育成が求められていると考えられる。

小学校教員養成コア・カリキュラム(試案)に基づく「異文化理解」および「様々な国・地域の生活・習慣」についての知識に関するシラバス構成は、90分×4回という限られた授業時間のなかで「外国語活動」を指導するうえで特に把握しておくべきであると考えられる事項に基づいている。加えて、先に述べたように小・中・高等学校を通じた英語教育を推進していることから、中・高等学校「英語」とのつながりを重視し、齟齬なく移行できるようにすることも考慮してシラバスを構成している。

宋(2008)が述べているように、小学校の外国語活動における異文化との接触は、自分たちとの違いに気づき、自文化を振り返る経験が重要であろう。「今まで知らなかった異なる伝統や文化に触れることで、そこに込められた人々の願いや多様な考え方を学べる」とともに「それと比較することで自分が

もっていた文化（自文化）を再認識することができる」（宋、2008）ためである。つまり、「外国語活動」あるいは「英語」の学習を通じて、自分と異なる他者との接触によって、自分との違いを知るとともに自分自身についても再確認することが大切なのである。

そのためシラバス構成では、まず「文化と多様性」の授業において世界の文化の多様性について取り上げ、世界には様々な国とともに文化があり、文化が言語に大きな影響をもたらしていることを認識することが必要だろう。Samover ら（2007）が指摘しているように、それぞれの文化のもつ価値観などの重要な側面は、昔話や絵本などにも反映されていることが多いため、「マザーグース」や「英米の絵本」などの授業と連携をすることで、読み聞かせによる「聞く力」の育成や英語に対する興味、関心の向上だけではなく、日本の絵本との比較や同じ内容の日本語版との比較を通じて、ほかの文化と自文化との違いや共通点の認識ができることを学ぶ機会を提供できると思われる。ここで重要なのは、共通点の発見や認識である。そもそも“communicate”の語源は、ラテン語の“communicatus”「他人と共有した」である。つまり我々は共通点があるからこそコミュニケーションができるのである。様々な文化的背景をもつ人たちに対し、関心を抱くとともに敬意をもって接し、コミュニケーションを図るためには、文化の多様性や違いに気づくだけではなく、共通点があることを認識することが非常に重要であると考えられる。

「異文化交流と言語コミュニケーション」の授業においては、英語と日本語を使ったコミュニケーションの違いについて扱う。「英語の文法および構文法」の授業で学んだこと—例えば、語順や主語の存在の大切さについての学習—を踏まえると英語と日本語を使ったコミュニケーションの違いがより一層把握できるだろう。さらに文化が言語コミュニケーション（・スタイル）に及ぼしている影響についても触れる必要があると思われる。日本のような集団主義的な価値観を重んじる文化では、間接的なコミュニケーション・スタイルを取り、共有している情報が比較的多いため、話の行間を読むことが期待されている。一方、アメリカのような個人主義的な価値観を重んじる文化では、直接的なコミュニケーション・スタイルを取り、共有している情報は比較的少ない

ため、コミュニケーションにおける言葉選びが重要視されている。このような基本的な異文化コミュニケーションについての学習も必須であろう。

そして「異文化交流と非言語コミュニケーション」の授業においては、小学生にもわかりやすく、馴染みのあるジェスチャーやボディ・ランゲージの違いや類似点について学ぶ。さらに時間に対する感覚や空間の使い方など、その違いはジェスチャーやボディ・ランゲージとは異なり、目に見える形となって表面化しにくいものであるが、これらの事柄もコミュニケーションに影響を及ぼすものであるため基本的事項として学ぶことが望ましいであろう。

最後の「異文化理解とステレオタイプ」の授業においては、異文化の違いを強調するあまり、我々が陥りがちなステレオタイプの危険性について学ぶ。すでに述べたように、異文化交流で大切なのは、相違点の尊重と類似点の認識である。違いにばかり目を向けることはステレオタイプや偏見につながるとともに、差別や自民族中心主義に陥る恐れもある。この危険性を認識し避けるために、ステレオタイプの性質について知ることは、「外国語活動」や「英語」教育を通じてのグローバル化に対応できる異文化理解、異文化コミュニケーション能力の育成には欠かせないことである。

これまで述べてきたように、「異文化理解」および「様々な国・地域の生活・習慣」についての知識に関する領域では、小・中・高等学校を通じた目標を考慮し、他の授業と連携しながら、様々な国の文化の多様性、相違点、類似点について効果的に学ぶ機会を設定することが望ましいと思われる。

宋誠. 2008. 小学校での異文化理解教育で大切にしたいこと. 英語教育. 大修館書店.

東京学芸大学. 2016. 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業. 平成27年度報告書.

文部科学省. 2014. 今後の英語教育の改善・充実方法について（報告）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～

Samover, Larry A., Potter, Richard E., and McDaniel, Edwin R. 2007. Communication between Cultures. Thomson Wadsworth.

3. 結語

本小論では、小学校 CC と中高 CC の比較・検討を通して、小学校 CC における「教科に関する科目」のシラバス構成について提案を行った。

既に何度か述べたように、小学校 CC と中高 CC では、そこに盛り込まれる要素のかなりの部分が同一であるにも関わらず、小学校 CC で考えられている「教職に関する科目（教科の指導法）」及び「教科に関する科目」の授業単位数は極端に少ない。しかしながら、文部科学省の「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」で、中学1年生の約8割が小学校でもっと英語の読み書きをしておきたかったと回答していることから分かるように、これまでのようなごく簡単なオーラル・コミュニケーションだけでは小学校高学年生の知的好奇心や学習意欲を満たすことは困難である。従って、提案されているコア・カリキュラムにあるように、これからの小学校教師にはこれまで以上に言語学や文学、社会や異文化コミュニケーションなどへの基本的理解や幅広い素養が求められるであろう。

コア・カリキュラムは総花的であり全てを扱うことはもともと物理的に不可能である、という批判も当然ある。しかし、小学校高学年という、好奇心も吸収力も旺盛で自我も目覚め始めるこの時期に、外国語という宝の山が彼らに与える可能性には計り知れないものがあるだろう。その鍵は、言語、文化、社会等に深く関心を寄せる小学校教師にある。本小論が提案しているような教科に関する科目は、コア・カリキュラムの要素を取捨選択するのではなく、要素ごとに児童のレベルや知的好奇心に適した具体的な内容を提案しているという意味で、非常に有意義なものとなるはずである。

次期の教員免許法では、「教科に関する科目」「教職に関する科目」という区分は解消され「教科及び教科の指導法に関する科目」に統合されることになっている。英語が小学校で正式な教科となり、今まで以上に子どもたちが学校という場で英語と接する年数が伸びたとき、彼らは英語の学習に何を求め何を身に付けていくのだろう。教職課程を担当する大学教員には、今まで以上に学校現場に足を運び、児童生徒の学びの様子をつぶさに見聞きすることが求められる。

(2017年1月17日受付)

(2017年3月9日受理)